

THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

## 地域での学びを世界へ展開する 人が育つ大学

SDGsを先取りした理念と  
地域を志向した教育研究

SDGsへの取り組みがグローバルな規模で広がる中、基本理念を基に開学当初から「環境」と「人間」をキーワードに持続可能な社会の創造に挑戦してきた大学がある。それが、滋賀県立大学だ。「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」をモットーに、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する、人が育つ大学」として独自の教育研究活動を展開している。その根幹となるのが、大学と地域が連携して多様な学びの場を提供する「地域教育プログラム」だ。基礎から専門的な学びまですべてに地域を志向した科目が配置され、フィールドワークや学外実習などアクティブ・ラーニングによる実践的な学びを実施している。

全学部・全学科対象の「近江楽土（地域学）副専攻」では、学生が実際に地域に入り、地域活動に必要なスキルを身に付けていく。CN（コミュニティ・ネットワーク）コースとSE（ソーシャルアントレプレナー）コースの2つがあり、企業や

自治体、NPOで活躍する多彩な「地域人」と対話する機会も豊富に設けられている。これからの時代に欠かせないネットワーク力と起業力を養う未来志向の人材育成プログラムと言えるだろう。

この近江楽土（地域学）副専攻の上位カリキュラムとなるのが、大学院に設置された副専攻の「近江環人地域再生学座」だ。大学院生と社会人が共に肩を並べて学ぶ。地域診断からまちづくり活動の実践まで、必要な知識・手法を教授し、地域再生のリーダーとなる「近江環人（コミュニティ・アーキテクト）」を輩出している。

全学的なサポートで学生が  
地域で自ら学ぶ「近江楽土」

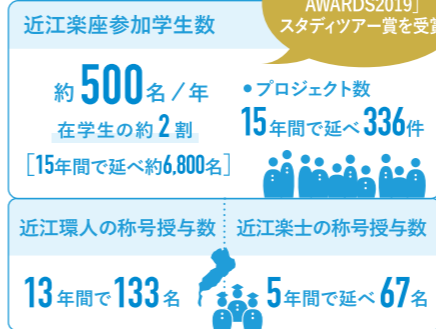
学生主体のプロジェクトを募集・選定して支援する「近江楽土」は、まさに滋賀県立大学のモットーを体現する取り組みだ。学生・大学・地域が共同して地域課題に取り組み、解決することを目指し、大学は活動に必要な事業費の助成や、行政・専門家の紹介などプロジェクトを進めていく。

クトを進めていくために必要なサポートを行う。この取り組みは、平成16年度に、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択されたことに始まる。

近江楽土は、学生であれば誰でも参加可能だ。学生は日頃の授業や地域との関わり合いの中から課題を見だし、そこからプロジェクトを計画する。年に1回行われる公開プレゼンを経て審査・採択されたプロジェクトは、全学的なサポート体制の下で活動・展開されていく。近江楽土が長年培ってきたノウハウや地域とのコネクションを生かせることも、各プロジェクトの大きな後押しになっている。そして、1年間の活動報告会では、

「大学SDGs ACTION! AWARDS2019」スタディツアー賞を受賞

▶ 数字で示す実績紹介



全チームがその成果と課題を共有するだけでなく、地域の方々と外部講師も招き、活発な意見交換を行う。このような「まちづくりを考える場」を創出することで、「取り組みのさらなる発展や、新たな活動につながる「種」が生まれていくという。学生たちも、活動を通じて教室では学べない多くのことを学び、大きく育っていく。

琵琶湖・沖島の振興から  
フィリピンの被災地支援へと  
国内外で活動するプロジェクト

近江楽土の1つである「座・沖



タクロバン復興支援プロジェクト「子どもたちと共に進めるコミュニティチャペルの建設活動」

島は、淡水湖に浮かぶ日本唯一の有人島・沖島が舞台。昔から大半の島民は漁業を生業とし、琵琶湖と共に暮らす生活を続けてきたが、近年は過疎化・高齢化の影響で独自の文化や暮らしの継承が危ぶまれている。この状況を改善するべく立ち上がった学生たちが、「学ぶ・まじわる・支える」をキーワードに平成28年から活動を開始。イベントの手伝いから観光用ベンチの制作までさまざまな活動が高じて島に移住する学生が現れるまでに。対話を重ねながら共に汗を流し、課題解決に取り組む学生たちの姿に、今では島の人たちから「沖島になくはならない存在」とまで言われる程の厚い信頼を寄せられている。

東日本大震災の後、滋賀県立大学の学生たちは東北の被災地支援に取り組んできた。震災により地域のさまざまな課題が浮かび上がる中、学生は被災地での活動を通して人に寄り添うことの大切さを学んでいく。そして、この被災地支援の輪は海外復興支援プロジェクトでは、平成25年に台風で甚大な被害を受



座・沖島プロジェクト「沖島夏祭りのお手伝い」

けたフィリピン・レイテ島タクロバンの復興支援に当たっている。メンバーは被災地を訪れて住民の要望を聞き取り、必要な建物の建設に取り組んできた。住宅がある程度整備された頃には、「人が集い、話し合う場所がない」という声を受け、コミュニティセンターを兼ねた教会の建設に着手する。いずれは住民が自力で家を建てられるように、地域の素材や技術を活用。さらに、現地の学校に通えない子どもたちと建設を進める中で、学生は「建築も1つの教育になる」と手応えを口にした。

SDGs達成に向けて  
一段と加速する大学の動き

滋賀県立大学が基本理念を基に展開する多彩な教育プロ

グラムや研究、地域貢献活動は、SDGsと深く結び付いている。「地域貢献大学のリーダーモデル」を目指す中で、平成30年6月には、「滋賀県立大学SDGs宣言」を行った。これは、これまでの大学の理念に基づいた取り組みと親和性の高いSDGsとを融合させる宣言でもあるという。「SDGs学生大会」では、滋賀県知事や津山市長を招いて学生とパネルディスカッションなどを行うほか、SDGsの視点に基づいた地域課題研究制度を創設、映画で社会課題を知るSDGsシナマを開催するなど、地域と共に取り組む中心的役割を果たしながら、目標達成に向けてその動きを加速させている。地域ひいては世界の持続的な発展に貢献する滋賀県立大学の挑戦から今後とも目が離せない。

UNIVERSITY INFORMATION

THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

滋賀県立大学

〒522-8533

滋賀県彦根市八坂町2500

URL: <http://www.usp.ac.jp>